

笑われる愚人

—『万葉集』巻十六の能登国の歌の成立について—

追手門学院大学 基盤教育機構 大谷 歩

1. はじめに

現存する日本最古の歌集である『万葉集』には、20巻に約4500首もの歌が収録されるが、笑いにまつわる分類項目は存在しない。他者を嘲笑したり互いに揶揄しあう歌は、幸いにして巻16にいくつかの作品をみることができるが、これらの作品の多くは宴席における詠歌の記録の一部であり、文学のジャンルとして認識され、収録されたものとは思われない。万葉びとたちは何を笑いの対象とし、笑うことをどのように認識していたのか。また、笑いにまつわる歌を詠むことにどのような意義を見出していたのか、それらを記録しようとした動機は何であったのか。他にも、上代文学における笑いにまつわる課題は種々認められるが、本稿では、『万葉集』巻16の「能登国の歌」と題される作品を取り上げて、上記の課題の一端を考察してみたい。

本題に入る前に、上代文献における「笑い」の記述について確認しておきたい。『万葉集』および『古事記』や『日本書紀』で笑うことを意味する漢字の多くは「咲」である。写本によっては「笑」と書かれる場合もあるが、「咲(笑)」には主にワラフとエムの2系統の訓みが認められる。また、笑うことを意味する漢字には「嗤」「蚩」「嘲」「哂」「噓」などがあり、嘲笑を意味する用例が多い。柳田國男氏の著名な「笑の本願」には、ワラフとエムとについて次のように述べられている。

ワラフは恐らくは割るという語から岐れて出たもので、同じく口を開くにしても大きくあけ、やさしい気持を伴なわぬもの、結果がどうなるかを考えぬか、またはむしろ悪い結果を承知したものとも考えられる。従って笑われる相手のある時には不快の感を与えるものときまっている。エムには如何なる場合にもそういうことがない。是が明らかな一つの差別であった。¹

この柳田氏の指摘は、上代文献においても合致するものといえる。『万葉集』の歌において「咲」の字は、①花が咲くこと〔サク〕、②（主に女性が）微笑むこと〔エム〕、に用いられる。たとえば、葛飾の真間手児名の伝説歌には「…望月の 足れる面わに 花のごと 笑みて立てれば…」〔望月之 満有面輪二 如花咲而立有者〕（巻9・1807 番歌／高橋虫麻呂歌集）²とあり、真間手児名は花が咲くように微笑んで立っていたと表現されている。また、「道の辺の草深百合の花咲みに咲まひしからに妻といふべしや」〔道邊之 草深由利乃 花咲企 咲之柄二 妻常可云也〕（巻7・1257 番歌／古歌集）のように、花が咲くことを「ハナエミ」ともいい、花が開くことと人が微笑むことは近接する様態として認識されていた。これが「エム」である。

一方の「ワラフ」については、『古事記』上巻の天の石屋段に次のようにある。

天宇受売命、手次に天の香山の天の日影を繋けて、天の真析を縋と為て、手草に天の香山の小竹の葉を結びて、天の石屋の戸にうけを伏せて、踏みとどろこし、神懸り為て、胸乳を掛き出だし、裳の緒をほとに忍し垂れき。爾くして、高天原動みて、八百万の神共に咲ひき。³

上記は天の石屋段において、八百万の神々が石屋にこもった天照大御神を外へ導こうとした諸策の最後、天宇受売命の神懸かりの様子を記す箇所であり、神々の作戦の仕上げは高天原が鳴動するほどワラフことであった。柳田氏は

また、「ワラヒには必ず声があり、エミには少しでも声はない。したがってエミは見るものであり、ワラヒはまた壁一重の隣からでも聴ける」（同前掲論）とも述べており、八百万の神々のワラヒは高天原がどよめくほどの大笑いであったことから、このワラヒは声を伴うものであることがわかる。一方、先に掲出した万葉歌のエミは微笑む容貌や花の開く様子を表現していることから、音声の伴わない視覚的な動作であった。

本稿が対象とするのは、柳田氏が言うところのワラフの類の笑いを導く作品である。もとい、そのように理解されている作品である。しかしながら、この作品にはワラフを意味する語は、無いのである。

2. 「能登国の歌」の解釈と問題点

能登国の歌三首

梯立の 熊来のやらに 新羅斧 落し入れ わし 懸けて懸けて な泣かしそね 浮き出づるやと 見む わし
(巻16・3878番歌)⁴

右の歌一首は、伝へて云はく「或は愚人あり。斧を海底に墜して、鉄の沈みて水に浮ぶ理なきを解らず。聊かにこの歌を作りて、口吟みて喩すことを為しき」といへり。

能登國歌三首

塔楯 熊来乃夜良尔 新羅斧 墮入 和之 河毛但河毛但 勿鳴為曾祢 浮出流夜登 將見 和之
右歌一首、傳云或有愚人。斧墮海底、而不解鐵沈無理浮水。聊作此歌、口吟為喩也。

この作品（以下、当該作品という。歌のみを指す場合は、当該歌という）は、『万葉集』巻16の後半部、地方の歌々を集めた部分に収録される、「能登国の歌三首」と題された歌群の1首目である。2首目の3879番歌は「梯立の熊来酒屋に 真罵るる奴 わし 誘ひ立て 率て来なましを 真罵るる奴 わし」という歌である。ここには当該歌と同じ「梯立の熊来」という地名が詠まれており、同じく前半の句と後半の句の間に囃子詞と思われる「わし」が挿入されていることから、能登国の同じ地方でうたわれていた歌をまとめて収録したものと考えられる。いずれも作者未詳の歌である。

能登国は、奈良時代に統廃合が繰り返された国である。養老2(718)年に越前国の羽咋、能登、鳳至、珠洲4郡が独立して一国となり、天平13(741)年には越中国に併合され廃国となるも、天平宝字元(757)年に越中国から分離して再び一国となった。当該作品は能登国の置かれた時期に記録・収集された歌謡であると目される。具体的に、養老2年から天平13年の23年間か、天平宝字元年以降とするかは、巻16の複雑な成立の問題に絡み見解の分かれるところである。伊藤博氏は、巻16までの巻々は天平17、18年頃までに集成されたとみており、当該作品を含む地方の歌々を収録した一群について「資料としては存外に古いと考えられる」⁵と述べている。作歌年代の推定については後に少し触れるが、筆者はそこまでの古さを認めるのは難しく、天平期の作ではないかと推測する。

当該歌の内容は、熊来の「やら」（海底あるいは沼）に「新羅斧」を落としてしまったが、泣きなさるな、浮き上がるかどうか見てみよう、というものである。「熊来のやら」の「やら」については諸説ある。代表的な説を挙げると、仙覚『万葉集註釈』（仙覚抄）には「ヤラトハ、ミツ・キテ、カツミ（薦）アシ（葦）様ノ者ナト生ヒシケリタル、ウキ土ナリ。田舎ノ者ハ、ヤハラトモ云」⁶とあり、下河辺長流『万葉集管見』には「やらは水の底なる泥を、北國の俗にいふならへり」⁷といい、賀茂真淵『万葉考』は「夜良は沼也、方言也、上總國にては、蘆・薦生たるを夜良と云、此哥にても其意也」⁸という。鴻巣盛広氏の『万葉集全釈』の解説が最も詳しく、

今の熊木村・中島村・西岸村・豊川村・笠師保村・鉦打村などの一帯を古く熊来郷と稱したらしい。この附近は

七尾湾西部にあり、その最奥部に位してゐるので、潮波の流動が少く、従つて附近の河川からの土砂が堆積して、浅い海になつてゐる。ここにヤラとあるのは即ちその泥底の浅海の義らしい。⁹

とあり、土砂が堆積して出来た浅海をあらわす能登の方言とみている。いずれにしても、左注には「斧を海底に墜して」とあることから、水にまつわる場所、沼や海を指す言葉であることは動かない。

その斧について「新羅斧」とわざわざ謳っていることからすれば、普通の斧ではない、特別な斧であろう。この「新羅斧」についての理解は、契沖『万葉代匠記』精撰本に「新羅斧ハ彼國ヨ渡リタル斧ヲ云ヘル坎。此方ニテ造レトモ、新羅ニ造ルナリノ此國ニハ替レル、ソレヲ學ヘルヲ云坎」¹⁰と説かれるとおりで、新羅国からの舶来品か、あるいは新羅の製造法によって拵えた斧かのいずれかであると思われる。そのような舶来品の斧、もしくは新羅の製法で作られた特殊と思われる斧を海辺（あるいは沼）に墮とすという事態は、どのような場合に起こり得るのだろうか。本稿ではこの点について明確に言及することはかなわないが、「やら」に特別な「新羅斧」を墮とすという状況が日常想像し得る範囲では起こり得ない事態であつたとすれば、笑いを誘う要因の一つとなつたかもしれない。あるいは、『万葉集全釈』が「なほ能登には朝鮮との直接の交通があつた形跡があるから、かういふ舶載の日用品も行はれてゐたのであらう」と述べるように、能登国の人びとにとってある程度馴染みのある品物であつたとするならば、「熊来・くまき」と「新羅・しらき」¹¹の音の類似性、すなわち母音「あ」＋「き」の韻を求めて選ばれた可能性も考えられよう。

次に左注によってこの歌の由来をみておく。いま引用テキストとした講談社文庫本の訳文を見てみると、次のようにある。

右の歌一首は伝えていうには「ある愚か者がいたとか。その者は斧を海底に落してしまひながら、鉄が沈んで水に浮かんで来ないという理屈を知らなかつた。そこでちょっとこの歌を作つて口ずさみ、教えさとした」という。

同書は「喩すことを為しき」の注で、「逆接的な喩し。後半句をさす」と述べており、水に浮くはずのない斧を、浮いてくるかもしれないからみてみよう、という皮肉を込めた喩であると解している。このように、愚人が斧を水中に落とすも、鉄が水に浮かばないという道理を知らないために、そのことを第三者が喩した歌であるという理解は、現代諸注釈に広く行われている解釈である。

①新潮日本古典集成本

右の歌一首には、こんな伝えがある。ある愚か人が、斧を海底に落し、鉄が沈んだら浮ぶ道理がないのもわからずにいた。そこで周りの人が、慰みにこの歌を作つて吟み、当てこすつてやったという。¹²

②新編日本古典文学全集本

右の歌一首は、言伝えによると、ある愚か者がいて、持っていた斧が海底に落ちたが、この男には鉄が沈み水に浮ぶ道理がないということが分らない。まずはこの歌を作つて、口ずさみ教訓にしてやった、ということである。¹³

①新潮日本古典集成本は、明確に愚人ではない周囲の第三者が吟じた歌であると解釈しており、また②新編日本古典文学全集本は、斧を墮としたのは愚人であると解釈している。これらの解釈に異を唱えたのが次の新日本古典文学大系本で、特に歌の主体、すなわち喩として歌を作つたのは愚人本人であると論じている。

一般に、この歌は、斧を落として泣く愚人を諭したものと理解される。しかし、それならば、「斧が浮き出るから見よう」という歌の結びは、嘲弄でこそあつても、愚人への「喩」とは言えない。また、万葉集の題詞・左注に「聊」の字は頻出するが、「聊」の前後に動詞のある二十に余る例のすべてにおいて、二つの動詞の主語は同じである。（中略）理を解しなかつたことと、この歌を作つたのは同じ愚人のことと理解されるべきである。¹⁴

新日本古典文学大系本は、斧を落とした人を慰めるために、道理を知らない愚人がこの歌を口ずさんだという、下記の井上通泰氏の『万葉集新考』の説により解釈すべきであると主張する。

拙き漢文にて自他の別明ならねど歌にナナカシソネとあると文に聊作此歌口吟爲喩也とあるとを見れば斧をおとしたるは愚人にあらず。左註の意は愚人が人の斧をおとしたるを見て鐵の沈めば水に浮ぶ理なきを知らで此歌を作りて斧をおとしたる人を慰めたるなりといへるなり。¹⁵

たしかに、大谷氏が指摘するように「聊」の接続の在り方からすれば「聊かにこの歌を作りて、口吟みて喩すること」をしたのは愚人でなければならず、すると歌で「な泣かしそね 浮き出づるやと 見む」と斧が浮いてくると信じている点も愚人の発言・思考として矛盾しない。歌で教え諭したのが第三者であったならば、「な泣かしそね 浮き出づるやと 見む」とうたうことは辻褃が合わないのである。

新日本古典文学大系本の校訂者の1人である大谷雅夫氏は、近年当該作品の問題点についての論考を発表された。そこでは、新日本古典文学大系本でも説かれた「聊」の用法の指摘に加え、新編日本古典文学全集本の「持っていた斧が海底に落ちた」という解釈について、

愚人が自らの斧を落としたという解釈だが、そう解釈されるためには、この漢文は「斧墮」ではなく「墮斧」の語順、つまりは「或有愚人、墮_二斧海底_一（或有る愚人、斧を海底に墮して）」の形でなければならない。しかし、ここはそうではない。（中略）すなわち、ある「愚人」が、たまたま誰かの「斧」が海に落ちたときに、「鉄沈みて理として水に浮かぶことなきことを解らず」してこの歌を作ったことと解釈される。¹⁶

と述べている。大谷氏のこの指摘は、「聊」の用法の指摘とあわせて強い説得力を持つものといえる。当該左注の読み取りは、新日本古典文学大系本と大谷氏が指摘するとおり、水に沈んだ鉄が浮かび上がらない道理を知らない愚人が、斧を墮としたある人物に向けて慰め諭した歌であるとみるべきであろう。

左注の文脈の読み取りは大谷氏が指摘するとおりであったとしても、依然解消されない疑問が残る。それは、このような愚人の滑稽譚が付随する当該歌は、能登国という地方に伝わる歌であり、かつ集团的要素がなお残存しているとみられる点である。この歌と左注の関係性をどのように捉えるべきかが、次なる課題となろう。当該作品の性格について、窪田空穂氏の『万葉集評釈』は次のように指摘する。

形は旋頭歌である。しかし短長長の形にしてゐるだけで、必しも五七音を守らうとしてゐないのは、短歌以前の謠物の形にしようとしたものである。此の歌は、形は古風であるが、心はむしろ新しい物に見える。それは真正の古風の歌には、斧を泥海に落して諦めかねてゐる者に對し、それを愚かと見、愚かさを滑稽と見、しかも嗤ひをこらへて、鄭寧な語をもつて揶揄するといふやうな、人の悪い、屈折を持つた歌は無かつたらうと思はれる。又、たとひ有つたにもせよ、それが民謠として謠ひ續けられてゐたとは想像出来ない。多分、奈良朝時代に入つての好事の人の、軽い興味より假構しての歌であらう。¹⁷

窪田氏は、当該歌を古風に装った奈良時代の作とみている。それは、このように愚人を揶揄する内容の歌が、伝統的にうたい継がれてきたとはみなし難いという理解からである。窪田氏も、従来説のように第三者が愚人を教え諭す歌とみているが、万葉歌において他者を笑う、いわゆる戯笑をテーマにした歌々は奈良朝（天平期）に活動したと考えられる人物の作品に多い。その点、窪田氏が当該作品を奈良時代の作と指摘したのも首肯されるのであり、また能登国の存国期間に照らし合わせると、当該作品は天平13年までに収集された可能性が高いと思われる。また、武田祐吉氏『増訂 万葉集全註釈』も当該歌を民謡風に装った歌と見ており、「民謡ふうになつてゐるが、何人かが民謡に擬して作つたものだろう。民謡の替歌というような性質の歌である」¹⁸と述べている。当該作品の題材・内容の新しさという点においては筆者も共感するのであり、両氏が述べるように、当該歌は能登国に伝わる歌謡の曲調を利用した、新たに創作された替え歌的な作ではないかと推測される。

では、この歌の作者はなぜあえて破調の歌謡風に仕立てて歌を作る必要があつたのだろうか。あえて謡いもの風に仕立てたからには、独詠歌として個人が密やかに楽しむ類の歌ではなく、集団で吟詠する、あるいは集団の場で供される歌であつた可能性が高いと判断される。

当該歌の集団性について、当該歌に挿入される「わし（和之）」からも考察しておきたい。「わし（和之）」は賀茂

真淵『万葉考』に「和之は和主の略也、人をさしていふ」ともいわれたが、加藤千蔭『万葉集略解』に紹介される本居宣長説に「宣長は『わし』はたゞ調へにそへていふ辭也。さいばらなどに此類のそへ辭多しといへり。さも有べし」¹⁹とあるように、現在では囃子詞とみる向きが多い。宣長が指摘する『催馬楽』には、たしかに囃子詞とみられる類の言葉が挿入される作品が多く存在する。たとえば「我駒」には、

いで我が駒 早く行きこせ 真土山 あはれ 真土山 はれ
真土山 待つらむ人を 行きて早 あはれ 行きて早見む²⁰

のように、「あはれ」「はれ」などの囃子詞が用いられている。当該歌は5・7・5・5（わし）／6・6・7・2（わし）、と音数の不規則な4句ずつで構成されており、「わし」が前半部分と後半部分の末尾に位置していることは明白である。このことから、「わし」には歌の調子を整える囃子詞的な役割が認められる。囃子詞を挿入するのは、複数存在する歌い手の調子を整えるためであり、単独で披露する口吟の歌には必要ないものであろう。

このように、当該歌の性質からは集団詠としての性格をみることができ、左注の愚人の伝えと当該歌とがどのような関わり合うのが問題となるといえる。次に、この愚人の喩と位置づけられた当該歌と、左注との関係性について論じてみたい。

3. 笑われる愚人——当該作品成立の背景

当該作品は、この愚人の無知や滑稽を笑うものとして理解されてきた。たとえば、鴻巣盛広氏の『万葉集全釈』は「熊來地方の民謡らしく、内容は斧の水に浮ばぬことを知らない愚人を笑つたもので、其處に滑稽味が溢れてゐるのである」と述べ、澤瀉久孝氏の『万葉集注釈』も「『な泣かしそね浮き出づるやと見む』と敬語まで使つて、誘ひかけたところに、相手をばかにしてゐるところを示したもので、愚人の愚行を嘲笑した意味が示されてゐるものと認められる」²¹と述べている。また、大谷雅夫氏は前掲論で、「この歌と左注の笑いは、愚者が智者を教戒し、慰謝するというその点にこそ存した」と当該作品の笑いについて指摘している。

たしかに、水に沈んだ鉄が自然と浮いてくるはずはなく、その道理を理解していない者はまぎれもない「愚人」であろう。その様が滑稽であることも否定しない。しかし、当該作品は愚人の愚かさを揶揄し、その滑稽さを嗤笑するために作られ、記録されたものだろうか。結論からいうと、筆者は当該作品は宴会などの場で、その場に集った者が左注にあるような愚人の滑稽譚を楽しみ、皆でこの「愚人」になってうたい騒ぐという類の歌だったのではないかと考えている。以下にその理由を述べていく。

当該作品を論じる際によく引き合いに出されるのが、同じ巻16に収録される、児部女王に嗤笑される尺度娘の作品である。

児部女王の嗤へる歌一首

美麗しもの何所飽かじを尺度らが角のふくれにしぐひあひにけむ（巻16・3821 番歌）

右は、時に娘子あり。姓は尺度氏なり。この娘子高き姓の美人の詵ふるを聴さずて、下き姓の媿士の詵ふるを応許しき。ここに児部女王の、この歌を裁作りて、彼の愚なるを嗤咲へり。

左注によると、ある時尺度氏の娘子がいて、「高姓美人」の男の「詵」、つまり求婚を聞き入れず、「下姓媿士」の求めに応じたという。このことを児部女王が「愚」とであるとして「嗤咲」し、この歌を作ったと伝えられる。児部女王は閨歴不明の女性であり、尺度娘子との関係も不明である。歌意も難解な部分があるが、「角のふくれ」は尺度娘子の選んだ結婚相手である「下姓媿士」を貶める表現とみなされ、児部女王の「嗤咲」は、尺度娘子の選択した男の容貌とそのような男を選んだ娘子に対して向けられている²²。

このように、児部女王の歌は明確に娘子の「愚」を「嗤咲」することが目的である。一方、当該作品においても、

歌の目的は斧を墮とした某かを愚人が「喩す」ことであり、「な泣かしそね 浮き出づるやと 見む」という歌の内容は、道理を知らない愚人の「喩」として矛盾はない。筆者が気に掛かるのは、この愚人が衆人の嗤笑の対象であり、愚人に対する嘲笑も含めて左注の伝えや歌を楽しんでいたならば、左注に「故、皆人その愚なるを嗤咲へり」のような記述があってもよかつたのではないか、という点である。このように考えるには、理由がある。

大谷氏は前掲論において、当該作品の愚人と、漢訳仏典『百喩経』に描かれる愚人の滑稽譚との共通点を指摘している。また、筆者はすでに注22の「児部女王の嗤へる歌一首」を取り上げた論考において、『百喩経』の「愚」の在り方について検討し、当該作品を例として前掲の児部女王の作品と『百喩経』との関係性を論じている。ただしこの論は大谷氏の別稿（新日本古典文学大系本の解説）²³で、「世間愚人」が仏典、中でも『百喩経』に頻出する語であるという指摘を受けての発見であった。すなわち、『万葉集』巻16の愚人にまつわる作品には『百喩経』が深く関わっていることが推測され、当該の左注の筆者が、奈良朝にたびたび写経された『百喩経』を認知していた可能性は十分に考えられるのである。そうであればなおのこと、当該作品が愚人を嗤笑することを意図していたならば、「皆で愚人を笑いものにした」という記述のないことが不思議に思えてくるのである。

『百喩経』は譬喩経典の一つであり、愚人の喩話を九十八話収録しており、各話の末尾には愚人の行いを仏教者や凡夫の言動に重ね、道徳的教訓や仏教的教戒を説くという構成である。その中には、当該作品の愚人とよく似た過ちを犯した愚人の話がある。

●『百喩経』巻1「船に乗り鉦を失ふ喩」（『国訳一切経』印度・本縁七）

昔、人有り、船に乗り海を渡る。一つの銀鉦を失ひ水の中に墮す。即便ち、思念ひらく「我、今、水に書き記を作さむ。之を捨て而して去り後当に之を取るべし」と行くこと二月を経て師子諸国に到る。一河水を見て便ち其の中に入り本失ふ鉦を覓む。諸人、問ふて言く「何の作す所を欲す」と。答へて言く「我、先に鉦を失ふ。今、覓め取らむと欲す」と。問ふて言く「何処に於て失ふ」と。答へて言く「初め、海に入りて失ふ」と。又復、問ふて言く「失ふて幾時を経たる」と。言く「失ふて来二月なり」と。問ふて言く「失ふて来二月、云何が此れを覓めむ」と。答へて言く「我、鉦を失ひし時水に書き記を作す。本画く所の水此と異ること無し。是の故に之を覓む」と。又復問ふて言く「水別ならずと雖も汝昔失ふ時乃ち彼に在り。今、此に在り、覓むるも何に由り得可けむ」と。爾の時衆人、大笑せざるは無し。

亦、外道、正行を修せず相似の善中横に計り苦困し以て解脱を求むるが如きは猶し愚人鉦を彼に失ひ此に於て覓むるが如し。²⁴

上記の内容は、ある人が海中に銀鉦（銀の食器）を落としてしまったが、水に記を付けたので後に食器を得ることができると思い、二ヶ月後にセイロン諸国に至り、河の中に入って失くした食器を探し始めた。そしてその訳を尋ね知った諸人に大笑いされたというものである。この人は「愚人」とであると評され、そのような行為は外道の行いに等しいと説かれている。

『百喩経』にはこのような例話が多く収録されており、そこに登場する愚人は大衆から嗤笑されるのが常である。愚なる行いは必ず嗤笑されるのであり、喩話としてその愚は正されるというのが一連の型であった。ここに、『百喩経』を参照することで〈愚人—喩—嗤笑〉という強固な結びつきが見出されるのである。つまり、筆者の疑問は、愚人の喩話には嗤笑がつきものであるのに、当該左注にはなぜ愚人が嗤笑されたという記述が無いのか、ということである。

この〈愚人—喩—嗤笑〉という関係性を押さえた上で、改めて『万葉集』の左注の在り方について確認しておきたい。当該作品を含めた「伝云型」の左注の形式について、伊藤博氏は「昔からこう伝え云われてきたという意味というよりはむしろ、誰かがある場面で伝え語ったという意味にとるべきもの」であり、「歌の由来に興味を置いた言葉であって、語りの場を反映する語」²⁵であると述べている。つまり、あくまでも歌の由来を文字に書き起こすことがこの「伝云」型の左注の役割であり、その結果がどうなったか、愚人が笑われたか否かに言及することまでは求めら

れなかった可能性が考えられる。もちろん、当該作品の漢文の拙いことは、夙に井上通泰氏や大谷雅夫氏が指摘する
とおりであり、書き漏らしたということも十分に想定される。しかし、滑稽な愚人の喩の歌が嗤笑の対象となったこ
とを多くの研究者が言及するように、この作品と嗤笑とは切り離せない関係にあり、それは先に述べた『百喩経』の
構造と等しく、愚人は笑われるべき存在であるという前提があるからである。

ここまでの考察で、左注に愚人が嗤笑されたことについての言及がないのは、愚人が笑われるのは自明のことであ
るため省略されたという理解、あるいは愚人が笑われたことまでは歌そのものの由来に関わりないため省略されたと
いう理解、あるいはその両方により省略されたということが考えられる。加えて、筆者は左注にあえて愚人を嗤笑す
る文言がないことに、積極的に意味を見出したいと考える。

当該歌が個人で吟じる性格のものとは見なしがたい、集団的な性格の歌であることは前章で述べたとおりである。
このことと、左注の内容が〈愚人一喩一嗤笑〉という結びつきをもって書かれ、理解されることを重ね合わせて考え
るならば、当該歌は宴などの歌に興じる場集った人びとが、愚人の滑稽譚を聞いて笑い、皆が愚人となって合唱さ
れた歌であったのではないかと推測する。嗤笑されるのは特定の個人としての愚人ではなく、その場に集い歌をう
たう全員であった、ということである。とすれば、この事情を筆録するのは誠にややこしく、むしろ歌の由来を記す
という左注の性格からも不要と判断されたであろう。まして、この左注の筆者はあまり漢文に長けていないようであ
ることも一因となったかもしれない。愚人の滑稽譚を笑い、さらに愚人の歌を皆でうたい楽しむ宴などの場に供され
たという状況が、当該作品の背景にあったのではないだろうか。

その滑稽譚と歌が筆録されたのは、前述したように奈良朝以降のことと思われ、『百喩経』などの漢籍仏典の知識
を持つ某かが創作した、あるいは似たような出来事が能登国で起こり、そのことに取材して物語化されたことが考え
られる。歌の成立について明言することは難しいが、先に武田祐吉氏が替歌説を論じていたように、あるいはその滑
稽譚を聞いた誰かが、土地の歌謡の曲調に合わせて見事に替え歌をしてみせたのだろうか。歌の成立事情をどのよう
に見定めるかは、今後の課題である。

以上のように、左注の滑稽譚に基づき、皆が愚人になり代わって合唱した歌と捉えるならば、当該歌が集団詠的な
要素を持ち合わせることで、左注に愚人の喩の歌として説明されること、愚人が嗤笑されたという文章のないことの説
明が可能となるように思われるのである。

4. おわりに

本稿では、『万葉集』巻16に収載される「能登国の歌」の1首目を取り上げ、当該作品の成立の背景を論じた。は
じめに、当該歌の語彙的な解説と、「わし」の囃子詞から当該歌は個人の独詠ではなく、集団詠的な要素を持ってい
ることを確認した。次に左注について、大谷雅夫氏の近年の論説を中心に、当該左注の文脈を井上通泰説および大谷
雅夫説で読解すべきことを論じ、その上で、当該歌と左注の関係性について考察した。

本稿における筆者の問題意識は、2点である。1つは、左注の愚人の滑稽譚と集団詠的要素のある歌との関係性、2
つに、道理を知らない愚人が得々と教え諭している様子を嗤笑することまでが作品の価値に深く関係しているにもか
かわらず、愚人を嗤笑するという文言のないことの理由である。2点目の問題については、大谷雅夫氏が指摘し、また
筆者も以前に検証した『百喩経』から導かれる〈愚人一喩一嗤笑〉の結びつきから生じた疑問であった。嗤笑されるべ
き愚人に対する揶揄の文言が左注に無いことと、歌の集団的性格から、当該作品は愚人の滑稽譚を楽しみ、皆が愚人
となつてうたうことを背景に成立した作品であったことを論じた。愚人は一個人ではなく、誰しもが愚人になり得る
ことから、「故、皆人その愚なるを嗤咲へり」などの記述は左注に書かれ得なかったのである。

もちろん、当該歌が一回的にうたわれた歌謡であるか、繰り返したうたわれたものかは当該作品の記述から判断する

ことは難しい。また、『万葉集』はあくまでも記載の文芸であるため、声でうたわれたレベルの理解を持ち込むことは控えるべきであることは承知しているつもりである。しかし、個人の独詠的な歌とは思われない当該歌と、左注の愚人の話との関係性は、より丁寧に説明されるべきであろう。その時に、嗤笑されたはずの愚人に対する明確な揶揄の文言のないことから、『百喩経』を手がかりとして上記のような結論に至ったわけである。巻16の作品の読解には大変な困難が伴い、本稿の解釈にも多くの課題が残されているが、当該作品の読解の一つの可能性として提示しておきたい。本稿が『万葉集』および上代文学における笑いの課題について、その一端でも論じることができていれば幸いである。

〔注〕

- 1 柳田國男『不幸なる芸術／笑の本願』（1979年、岩波文庫／初版は1946年、養徳社）。以下、柳田氏の論は同書による。
- 2 『万葉集』の引用は、中西進『万葉集 全訳注原文付』（講談社文庫）による。以下同じ。
- 3 山口佳紀・神野志隆光 校注・訳、新編日本古典文学全集『古事記』（1997年、小学館）。
- 4 第6句「河毛侶」の箇所には校異が存する。諸写本において「河毛侶」に作るのは、西本願寺本・紀州本・大矢本・細井本・温故堂本・京都大学本・活字無訓本・活字附訓本・寛永版本の諸本であり、『仙覚抄』以下多くの古注釈も「河毛侶」に作る。一方、類聚古集・尼崎本・広瀬本には「阿毛侶」とあり、京都大学本の「河」の右傍に緒で「阿」とあり、左傍に「イ本」とある。日本古典文学大系本は「河毛侶」を採り、「心にかけて。心配して。転じて、決しての意か」（1962年、岩波書店）とし、澤瀉久孝『万葉集注釈』は「後世は下に否定、ことに禁止の表現が来る事が多く、その否定の意を強めて「決して」の意となるので、ここもさうした意味にとるべきではなからうか」（1966年、中央公論社）と追認する。一方の「阿毛侶」は、類聚古集や尼崎本を重視した日本古典文学全集本・新編日本古典文学全集本・新日本古典文学大系本などが採用しており、新日本古典文学大系本は「声を立てて、声を立てての意に解する」（2003年、岩波書店）と述べている。
- 5 伊藤博「由縁有る雑歌」『万葉集の構造と成立』下（1974年、塙書房）。
- 6 万葉集叢書8『仙覚全集』（1977年、臨川書店）。
- 7 万葉集叢書6・7『万葉集管見・万葉集目安補正』（1977年、臨川書店）。
- 8 『賀茂真淵全集』第5巻（1985年、続群書類従完成会）。以下、『万葉考』の引用は同書による。
- 9 鴻巣盛広『万葉集全釈』第5冊（1937年〈再版〉、廣文堂書店）。以下、『万葉集全釈』の引用は同書による。
- 10 『契沖全集』第6巻（1975年、岩波書店）。
- 11 「新羅」をシラキと訓むことは、『万葉集』巻15・3696番歌に「新羅奇敵可（しらきへか）」とみえ、『出雲国風土記』に「栲衾、志羅紀の三埼」とみえる。
- 12 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎 校注、新潮日本古典文学集成『万葉集』4（1982年、新潮社）。
- 13 小島憲之・東野治之・木下正俊 校注・訳、新編日本古典文学全集『万葉集』4（1996年、小学館）。
- 14 佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之 校注、新日本古典文学大系『万葉集』4（2003年、岩波書店）。
- 15 井上通泰『万葉集新考』第6巻（1928年、国民図書株式会社）。
- 16 大谷雅夫「『万葉集』の訓詁三題―「灰にていませば」（二一三）・「ある愚人」（三八七八左注）・「大島の嶺に家もあらましを」（九一）―」、『美夫君志』第101号（2020年10月）。以下、断りのない限り大谷氏の論は本論による。
- 17 窪田空穂『万葉集評釈』第10巻（1985年、東京堂出版）。
- 18 武田祐吉『増訂 万葉集全註釈』第11巻（1957年、角川書店）。
- 19 加藤（橘）千蔭『万葉集略解』第4冊（1931年、博文館）。
- 20 白田甚五郎・新聞進一・外村南都子・徳江元正 校注・訳、新編日本古典文学全集『神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集』（2000年、小学館）。
- 21 澤瀉久孝『万葉集注釈』巻第16（1966年、中央公論社）。
- 22 大谷歩『万葉集の恋と語りの文芸史』第8章「愚なる娘子―『児部女王の嗤へる歌』をめぐる―」（2016年、笠間書院）。
- 23 大谷雅夫「萬葉集と仏教、および中国文学」（新日本古典文学大系『万葉集』4、2003年、岩波書店）。
- 24 『国訳一切経』印度撰述部・本縁部7『百喩経』（1934年、大東出版）。
- 25 伊藤博「万葉の歌語り」（『国文学 言語と文芸』4巻1号、1962年1月。後『万葉集の表現と方法 上』1975年、塙書房に収録）。

【付記】

筆者は上方文化笑学センターの事務局担当という立場ではございますが、本誌への投稿をお認めくださいましたセンター長の広瀬依子先生ならびに所員の先生方に深く御礼申し上げます。

